令和５年度　第１回白馬村図書館協議会　議事要旨

日時：令和 5 年 6 月 30 日（金）15:45～17:45
場所：白馬村役場 3 階 302 会議室 ／ 白馬村図書館

区分	氏名	所属	出欠
委員	冨山 正明	白馬村社会教育委員長	○
	太田 洋一	白馬村公民館長	○
	本多 希	白馬高等学校	○
	篠﨑 千恵	白馬南小学校	―
	髙橋 英子	公募委員	○
	澤 清美	公募委員	―
	木曽 寿紀	公募委員	○
	嶋田 多希	公募委員	―
アドバイザー	篠田 尚利	県立長野図書館	○
事務局	松澤 宏和	生涯学習スポーツ課長兼図書館長	○
	松沢 由美子	白馬村図書館司書	○
	大坪 裕子	白馬村図書館司書	○
	大熊 大智	白馬村図書館司書	―
	山岸 由美	白馬中学校図書館司書	○
	海端 弥生	白馬北小学校図書館司書	―
	渡邉 宏太	生涯学習スポーツ課生涯学習係長	○

１．　開会

松澤生涯学習スポーツ課長兼図書館長が開会を宣言した。

２．　あいさつ

（冨山委員長）
梅雨らしい天気となってしまった。新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行されたが、感染者が増えて第 9 波と言われている。令和 4 年度の運営実績報告や前回の協議会から継続して議論する内容もあるが、各委員から積極的にご意見を述べていただきたい。

（太田委員）
公民館長が替わり、太田委員が新たに就任したため、自己紹介を行った。

３．　会議事項

（１）令和４年度の事業報告・利用状況及び令和５年度の事業計画について

（事務局）
資料１により説明した。
令和 3 年度の蔵書点検で感染症の影響で延期になり、協力いただく予定であったボランティアに絵本のラベル貼替えや百科辞典の訂正シール貼り等を依頼した。
本のリサイクル市として 7 箱分程準備し、文化祭で 2 箱分、図書館で 1 箱分くらいを来場者にお持ち帰りいただいた。残りの 4 箱程度は処分予定である。
新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行し、カウンターのアクリル板は撤去した。テーブルの仕切りは、以前から対面で座りにくいという声もあったため、プライバシー等の観点から引き続き設置している。
昨日、北小の授業参観・PTA 会議等があり、放課後に小学生が多く訪れ賑やかになった。貸出冊数はコロナ前に戻っていて、来館者数は印象的には戻ってきている感があるが、数字的に戻っていない。
利用登録者数が減少しているのは、10 年以上利用のない方（230 名）の登録を除籍したためであるが、新規登録も良い感じで伸びている。
書架の収容能力が限界に達しているため、規定に基づいた除籍を進めていることから、蔵書冊数は減少している。今後も除籍は進めていくが、購入・寄贈による受入冊数は増加傾向にあり、読んでもらえる資料を増やしていきたい。
市町村と県による協働電子図書館「デジとしょ信州」が 8 月 5 日にスタートし、まもなく 1 年を迎える。年度末時点の登録者数は、長野県全体で 10,780 人、白馬村は 75 人で、57 人は図書館窓口にて申請、5 人が電子申請、残りの 13 人は県立経由で申請したものと思われる。当初、メインターゲットを電子端末利用頻度の高い中高生など 10 代としていたが、白馬村の 10 代登録者数は 0 人で、40 代～50 代の登録・利用が多い。町村単独での電子図書館導入は難しいが、こうして全県的に取り組み、費用負担も人口に応じた金額（白馬村：約 4 万円）設定であるため、とてもありがたい。今後、視覚障害者の利用や学校連携等も模索したい。白馬村は利用者支援・広報部会に参加しているが、会議がオンライン開催であるため負担感が少なく助かっている。

（委員長）
デジとしょ信州の 10 代の利用が少ないのは寂しい。図書館に来館する世代と同じ状況担っていると感じる。

（委員）
　子どもたちの読書ばなれや、端末があると子どもたちは別のことをしてしまうため、なかなか読書という流れにならないと感じる。

（事務局）
　図書館に来る利用者にデジとしょを奨めたりもするが、「紙が良い」と言われてしまうことも多い。他館から取り寄せても読みたいという本がデジとしょにあっても、電子を選択してもらえない。
　館内にポスターを張ったり図書館だよりに掲載したりしているくらいなので、今後は 10 代に向けた情報発信も取り組みたい。
　家族で登録された方で、海外に帰国する際に乗り換えの待ち時間で利用された方がいて、「いつでも・どこでも」というデジとしょらしい使い方だと感じた。

（委員）
　10 代の利用が伸びないことに対して、何か良い解決策はあるのか、それとも、それはそれで良しとするのか、県立長野図書館としての考えはあるか。

（アドバイザー）
　デジとしょ導入当初は若い層の利用を意識していたが、助成金をいただく際にも全世代を対象とするよう要請があり、選書も広い視点で検討している。全県的に見ても 30 代～50 代の利用が多く、開館時間内は働いていて図書館に行きにくい人が多いことが要因と考えている。デジとしょであれば、帰宅後の夜遅い時間でも朝早い時間でも、図書館に足を運ばずに本を借りて読むことができる。若年層の普及拡大に向けて、佐久市の小学校では音声読み上げを活用した英語の学習が研究授業として行われていたり、学校によっては朝読書の時間にタブレットでデジタル書籍を読んでも良いとしているところもあったり、デジとしょの学校連携チームでも検討されている。
　白馬村に限らず、全県的にも 10 代の来館者が少ないことは課題であるが、学校の図書館を利用する生徒も多く、公共図書館に来てもらうのは難しい。「読書」に対する考え方も人それぞれで、児童・生徒の不読率が高いことが課題とされているが、一方で長野県では朝読書がほとんどの学校で行われているにもかかわらず、「本を読んでいますか？」という質問に対して「読んでいない」と答える児童・生徒が多い。「1 冊読み切っていないから」といったことも理由と考えられるが、初めから終わりまで読みきらなくても、読書していることに変わりはないし、電子機器でマンガなどを読んでいる生徒も多いと思う。

（委員長）
　中高生は好奇心の強い時期であるため、情報にアクセスしたいと思う機会は多い用に感じる。「読書」という言葉のイメージに齟齬があると思われる。白馬村には本屋が無く、意図していない本との出会いが生まれる機会がない。図書館も「読書をしに行くところ」と

いうイメージを持たれていそうであるが、ふらっと立ち寄って雑誌などを気軽に読んだりするような使い方もしてほしい。

（事務局）
　今の図書館は書架が高いものが多いが、小学生は視点が違うため、子どもたちの目線の高さも意識しながら配架していきたい。

（委員長）
　子どもたちも成長して大人になっていくため、いつかデジとしょを利用したくなる時期が訪れると思われる。そういった手段があるということを知ってもらいながら、中身を充実させていくことも重要と考える。

（委員）
　デジとしょの蔵書に「デジタル化地域資料」という記載が、どういったものがあるのか。

（アドバイザー）
　デジとしょの蔵書には、出版社からライセンスを購入したものと、著作権が切れたもの（青空文庫）の他に、オリジナルコンテンツとして市町村で内容を追加できる領域がある。現在、高森町と生坂村の町誌・村誌が登録されていて、地域資料についてはライセンスの制限が無いため、何回でも借りられるし、同時に多くの人が見ることができる。高森町では学校の授業でも使われている。今後、内容を充実させていきたいが、資料をデジタル化する予算は市町村で確保する必要があるため、なかなか進められていない。

（委員長）
　除籍についてはどのように進めているのか。

（事務局）
　蔵書が少なかった時期はとにかく増やすことを重視してきて、近年は収容スペースに余裕がなくなってきたが、除籍基準が無く、汚損・破損したもの以外はほぼ除籍していなかった。現在は基準に沿って譲渡したり破棄したりしている。

（委員長）
　新型コロナウイルス感染症の5類移行で来館者の様子に変化はあったか。

（事務局）
　大きくは感じないが、最近は社会人や中学生が勉強をしにきたり、長時間館内に滞在する人も増えてきたり、少しずつコロナ前の状況に戻っているように感じる。

（２）図書館システムの更新について

（事務局）

これまで、平成 26 年 9 月に図書館システムを更新し、5 年でリースアップした後も再リースを続けて 8 年以上経過している。その間、北アルプス５市町村でのシステム統合を検討してきたが、実施時期や予算的な面でも合意に至らない状況が続き、白馬村の現行システムのソフトウェアもハードウェアもサポートが修了するなど継続利用の限界を迎えていることから、令和 5 年 4 月にソフト・ハードとも単独で更新した。他社の見積も取ったが、データ移行費が発生することや、円滑な更新、今後のシステム統合の可能性等も踏まえて、これまで利用してきた NEC のシステムの最新版にバージョンアップし、サーバーを館内に設置しないクラウド型のサービスを利用することとした。

（事務局）

機能は変わらないが、Web-OPAC の画面（見た目）が変わったため、慣れないこともあり「使いにくい」と言う利用者がいた。

これまで非表示としていた「貸出人気ベスト 10」を表示するようにした。

パスワード設定をすれば、利用者カードの代わりにスマートフォンの画面にバーコードを表示して本を借りることが可能である。

現在、システムからのメールが送信できない状況になっているため、対応中である。

（委員長）

インターネットからの予約も増加傾向にあるようなので、多くの人に利便性を感じてもらえると良い。

（事務局）

北アルプス地域のシステム統合については、大町市の更新のタイミングが鍵になるが、引き続き検討したい。

（３）図書館等複合施設の検討状況について

資料３「図書館等複合施設の検討状況について」に基づき事務局から説明した。

（事務局）

建築費の高騰等もあり、3,000 ㎡の複合施設の本体建築費で約 18 億円、設計や外構、什器備品、既存施設の解体撤去等も含めると初期費用が約 25 億円と積算した。また、現状の図書館事業や類似事例を参考に維持管理費を 5,300 万円／年と算出した。

その条件で官民連携手法を導入した場合に、経費の軽減が図れるか、民間事業者が独自事業などを実施する可能性があるかといったことを調査した。

興味・関心を有する民間事業者は複数存在したものの、経費の軽減についてはあまり期待できないこと結果となった。
周辺整備等も必要であり、村の財政状況を考えると、この事業規模ですぐに着手するのは難しい状況であるため、事業規模を縮小して実施することや、選考して子育て支援施設を整備して、第二期工事として同一敷地内に図書館を整備することなども含めて、方向性を決定していきたい。
整備スケジュールも含めて、秋には方針をお示しできると思うが、基本計画を決定する前に説明したり意見をもらったりする機会は設ける予定である。

（委員長）
建築費の高騰もあり、難しい状況であるが、頓挫せず何とか形にしていただきたい。

（事務局）
これ以上維持管理運営費を削減すると、民間事業者が運営するのは難しいと思われる。直営となった場合でも、館長を外部の専門家に依頼したり、職員の派遣や研修を行ったり、運営に関して助言をもらうなど、何かしらの民間のノウハウを活かせる仕組みを考える必要があると考える。

（委員）
昨年度実施していた検討委員会の意見は反映されるのか。

（事務局）
基本計画の見直しの中で、検討委員会の意見もしっかり取り入れていく予定である。

（委員長）
官民連携手法での整備は難しいという理解でよいか。

（事務局）
事業費を圧縮するとなると、いわゆる PFI 等の手法で整備・運営することは難しくなる。それなりの経費をかけて良質なサービスを提供するのが民間の狙いであり、安く運営したいのであれば直営でやってくださいという話になってしまう。最終的には基本計画見直しの中で確定するが、結局は民でも官でも誰がどんな想いで運営するかということになると思うし、運営のためにどう設計できるかが大切と考える。

（４）汚損資料と雑誌の取り扱いについて

図書館に移動し、どの程度の汚損で弁済を求めるか、雑誌の保存期間について、資料を見ながら協議を行った。

■ 汚損資料について

・ 文字が読めない、一部が欠損しているといった場合は弁済の対象とするが、ある程度の汚損・濡れは許容しても良いのではないか。
・ カビが生えてしまうと他の書籍にも影響を及ぼしてしまうため、ちょっとした汚損でも弁済を求めるというよりも、まずは素直に申し出てもらい、何による汚損なのか正確に把握して必要に応じて対応することが望ましい。
・ 気づいたときに確認を求めるが、「私ではない」と言われてしまうとそれ以上は追求できない。
・ 汚損や水濡れの事例などを示しながら、大切に扱ってもらうよう定期的に啓発することも大切。

■ 雑誌の保存期間について

・ 内容や需要によって 1 年や 3 年など各館で保存期間を定めていると思われる。
・ 県立長野図書館にある雑誌は、貸出はできないが永年保存となっている。
・ 北アルプス地域や中信地域で情報共有して分散保存するのも一つの選択肢である。
・ 最終的には国立国会図書館には全て保存されているため、地域に関係ないものであればそれほど長く保存しなくても良いのではないか。
・ 地域に関係ある記事のみを切り抜いて保存するのも一つの方法である。
・ 中信地区の会議で他館の状況を聞いたり、利用者のニーズ把握に努めたりしながら検討してはどうか。

４． 閉会

松澤生涯学習スポーツ課長兼図書館長が閉会を宣言した。